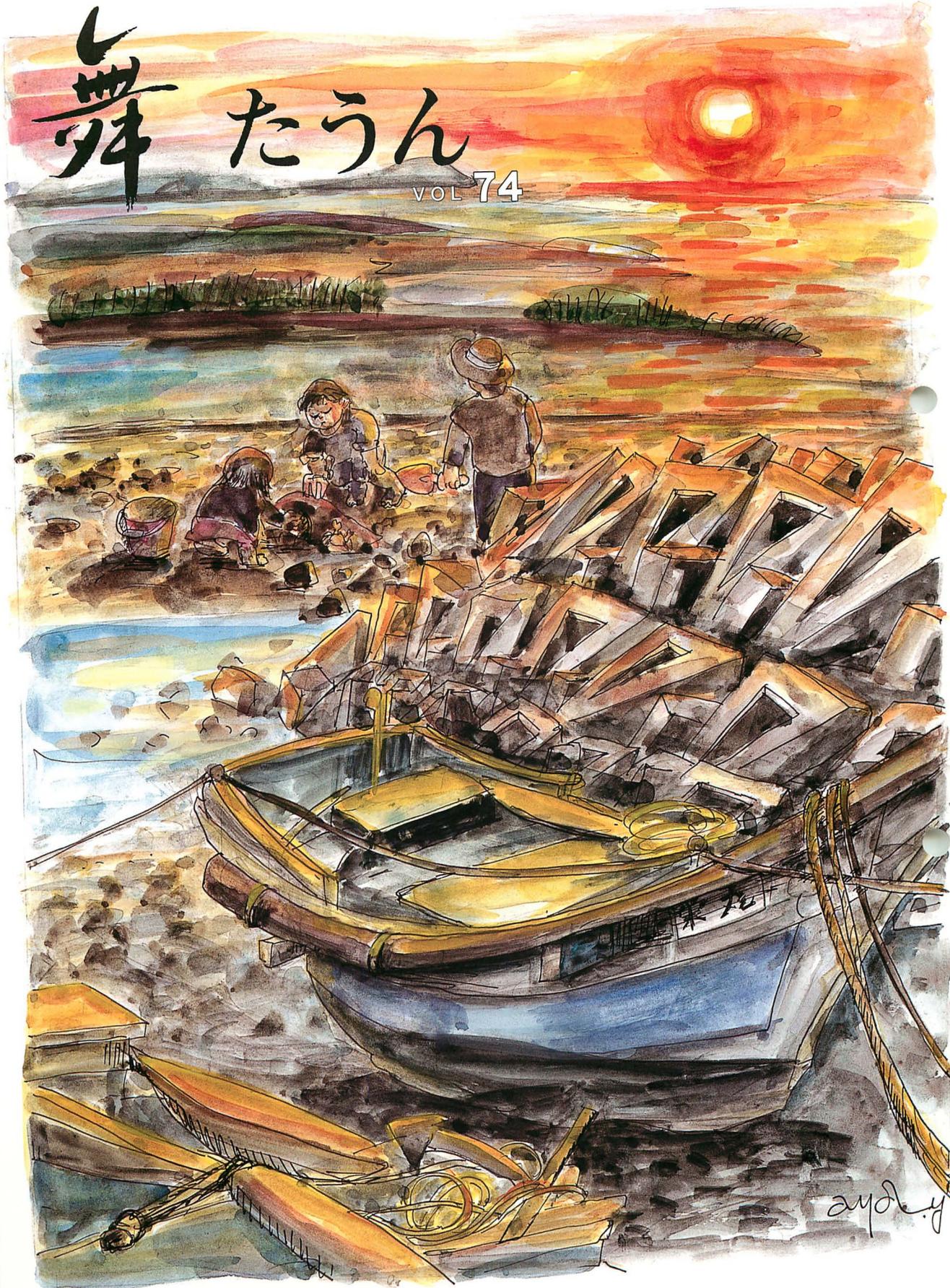


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 74



aydy

アングル

「アグリ・ルネッサンス（農の再生）を目指して」

菜の花プロジェクトネットワーク 会長／藤井 絢子 …… 1

特集

『水辺の環境を守る』

特別なことでは無いと思うんですが…

西条市／菅 圭一郎 …… 2

命の川を守り夢をえがく

広見町／葛川 熊夫 …… 4

豊かな自然を子どもたちに

宇和町／上甲 俊子 …… 6

『万物の根源は水である!!』

八幡浜市／水本 孝志 …… 8

素晴らしい未来を子どもたちにパトンタッチ

大分県湯布院町／今井 英子 ……10

論談—まちづくり—

水のきれいな川、汚れた川 そして良い川とは？

—小さな生物から見た川の評価—

松山淡水ベントス研究所 主宰／桑田 一男 ……12

キラリ光るまち

パッションで前進

静岡県三島市／渡辺 豊博 ……14

引き算型まちづくりの事始め（五）

内子町／岡田 文淑 ……16

トークナウ

身近な自然が教えてくれること

松山市／斎藤 智子 ……18

よそ者の小田町の生活

小田町／市川 寛 ……19

風おこしのちかい

水辺が教えてくれること—環境を思う心を育てよう—

宇和島市／山田 佳代 ……20

媛のかわら版

キャンペーンおばさん

松野町／隅田 深雪 ……22

研究員レポート

みちのくひとり旅

池田 大作 ……24

MY TOWN うおっちんぐ 歩キ目デス&足ラテス

津島町ウォッチング・パート1「ここはパニーランドか!？」

岡崎 直司 ……26

媛のくにフラッシュ 「雲母（きらら）荘」 ……28

information センターからのお知らせ ……29

特集

「水辺の環境を守る」

日々の暮らしの中で欠かせない水。私たちは水を利用して、豊かな生活と地域の発展を実現してきました。

一方で、水質汚染や河川水量の減少、近年の少雨化による渇水の発生など、水を取り巻く環境は深刻な状況に直面しています。

水は限りある資源です。これからは、行政レベルだけではなく、地域住民も一緒になって健全な水の循環系の構築を図っていくとともに、水を大切にする意識を高めることが大事になってきます。

今回は、「水辺の環境を守る」というテーマのもと、地域で実践されている方々に登壇願いました。

水辺は水の循環系の構築において重要な役割を果たしていますし、水への関心を高める大切な環境教育の場にもなっています。

皆さんも、身近にある水辺に足を運んでみて下さい。そして何かを感じてみて下さい。

（編集子 奥山）

表紙の言葉

水辺の近くで遊ぶ子ども姿を見なくなった。水辺の生き物の減少で、自然との関わりが減り、興味を注ぐ事が無くなったのでしょうか。

重信川の河川、出合も、以前は家族連れで、カニ捕りや、砂遊びなどをして戯れる姿が見られたが、今では水辺に飛びかう野鳥を遠めに、見学に来る人が立ち寄る程度でしょうか。野鳥のいる長閑な風景に時を忘れて、野鳥を見送ってしまった。

柳原あや子



菜の花プロジェクト第4ステージ 「アグリ・ルネッサンス (農の再生)」を目指して

菜の花プロジェクトネットワーク

会長 藤井 絢子



滋賀県では七十年代中ごろ、合成洗剤ではなくせっけんを使うという運動が起こる中で、家庭から出る廃食油を資源として回収してせっけんにリサイクルしようという取り組みが進められてきました。「菜の花プロジェクト・第一ステージ」です。県下各地に廃食油の回収ポイントが生まれ、廃食油も順調に回収されるようになってきました。

ところが、八十年のびわこ条例の施行後、「無リン合成洗剤」の登場とともに、条例制定前には七〇・六%にも達していたせっけん使用率が徐々に低下を始めたのです。

このままでは回収した廃食油をせっけんにリサイクルしても「使われないせっけんのゴ

ミ」になってしまうおそれがあります。廃食油回収を続けるのか、中止するのか、続けるなら「せっけん」に代わるリサイクルの出口をどこに求めるのかに悩まされました。

そうした中で、ドイツでナタネ油を精製して軽油の代わりに燃料として利用しているという話が聞こえてきました。植物油で自動車が行くというのです。

にわかには信じられない中で、それでもワラをもつかむ思いの私たちは、ドイツの情報収集を始め、確かに植物油(天ぶら油)をエステル転換すればディーゼルエンジンの燃料になることを知ったのです。廃食油を軽油代替燃料(BDF)へリサイクルするという「第二ステージ」の始まりです。大学や工業技術センターなどの協力も得ながら、BDF精製プラントの開発に乗り出し、BDFの使用実験も行い、九十五年に愛東町にBDFプラント一号機が設置されました。「菜の花プロジェクト」は県内外に広がっていきましたが、BDFを軽油代替燃料にしようとする廃食油の回収量だけではとても足りません。そこで、注目したのが転作田です。

転作田に「エネルギー生産作物」を栽培す

る(食糧をつくるだけが農業ではない)という「第三ステージ」が始まりました。転作田に菜の花を植え、それをナタネ油にして地域で使い、使った後は廃食油回収ポイントを経由して回収し、BDFに精製して地域のディーゼルエンジン機械で使うという仕組みです。

この「資源循環型社会の地域モデル」は好評です。具体的であること、わかりやすいこと、地域の特性や課題を加味しての取り組みが可能なこと、などがその理由です。

二〇〇一年には滋賀県新旭町で「菜の花サミット」を開き、全国組織である「菜の花プロジェクトネットワーク」も設立されました。サミット開催地は二〇〇五年まで決定していません。

いま、菜の花プロジェクトは「第四ステージ」に入っています。それを「アグリ・ルネッサンス(農の再生)」と呼んでいます。

それは、「農の多面的機能の活用」を具体的に展開しようという段階です。このことで、「地域自立の資源循環型社会」の実現と「活力ある農」「活力ある地域」の再生を目指したいと思います。

特別なことでは無いと思うんですが…

基本理念 豊かさの創造 自然と生活の融合
基本方針 原点に還るまちづくり
社団法人西条青年会議所 創立30周年記念事業
自然と生活の融合を目指すアメニティタウン西条の発信
・ビオトープ水都西条 御舟池
・西条自然観察少年団
・かわせみ宮巣箱設置



西条市
社団法人 西条青年会議所
創立30周年特別会議

議長 菅 圭一郎



「めだかつて絶滅危惧種Ⅱ類に分類されているって知ってる?」
「うそや そこら辺にウジヤウジヤおるがね」
「ほんまやて! 五年生が理科で使うめだかを取ってくるのにみんな苦労しよるよ」
「えーっ! 西条で?」
「どなんなつとるか明日行つて見てみよ」
「どーだった?」
「コンクリートの水路ばかりでなんにもおらん…」
四国の水がめは早明浦ダム。松山の水がめは石手川ダム。ここ何年か水不足が話題に上がりますね。別に自慢している訳ではありませんが、西条は水がめの上に街が出来ていると言つても過言ではありません。推定地下水埋蔵量は約三億トン。すごいですね。しかしながら平成十年の水収支を見ると、収入として西条の母なる川・加茂川よりの伏流水、その他の川も合わせた合計約一億トン。支出として農業用、家庭用、工業用、うちぬきの水、すべて含めて約一億トン。うちぬきとは西条特有のもので、鉄パイプを地下十メートル程打ち込んだときに伏

流水の圧力で地下水が吹き上がってくる現象で、市内に二千箇所あるのですが、今の所一年中たれ流しの状態です。表面上はうまくいっているようですが、平成六年の大洪水では干上がった井戸も多数出ました。つまり、このバランスには後が無いと言う事です。

「西条は水だけはふんだんにあるけんのお」この意識レベルで本当にいいのでしょうか? そのうち「金のたまごを産むめんどりのおなかを裂く」事になりはしないか、また水資源の大切さに気付き、早くから現実的な対策を取っている他の市町村に決定的な遅れを取り、将来像も描けない「裸の王様」になるのではないかと危惧しているのは自分だけでしょうか。考えすぎ? 杞憂であればいいのです。

ビオトープ水都西条 御舟池

前述しましたように、今現在も「うちぬき」からは水がこんこんと湧きでております。その豊富な水に育まれた豊かな環境を次世代に残すために、その地域に生息する希少な動植物の保護繁殖、また未来を担う子供達に水や泥、水生昆虫やめだかなどに触れてもらうことの大切さを肌で感じて頂きたいとの目的で造りま

した。この池は完全にオープン施設であり、自由に使っていたく事が基本です。もちろん獲って持って帰ってもらってもいいんです。が、「えーっ獲ってもいいんですかあ？」と皆さんびつくりされます。いかんせん悲しい事に、大人の方はバーゲン品のワゴンをあさるがごとく根こそぎ持って帰って頂いてるようで：池に入って獲るのは子供と一緒！獲って持って帰って頂くのはいいのですが、こ

こは重要な所です。持ってきた物は絶対に放流しない事が原則なんです。生態系を保護するのにミドリガメやグッピーがワンサカ繁殖しているんじゃない目も当てられません。事実夜市の金魚がちらほら：

西条自然観察少年団

市内の小学五年生を団員として募集し、地域周辺に生息する動植物の希少性、他には見られない優位な条件や豊かな環境を次世代に引き継ぐ為に、体験や観察の中でその大切さを感じてもらおうと発足しました。御舟池を活動拠点に頑張っております。参加するとオリジナルバッジがもらえます。これで結構ムキになって参加する児童もいたりして・御舟池の様変わりを二年間に渡って見てもらう事も大事な目的のひとつです。

かわせみ観察地整備事業

市の鳥であるかわせみの生態を子供たちと観察し、かわせみの保護と繁殖にかかわることはできないかとの思いからこの事業を行いました。下水道の普及に伴って市内の川に小魚がたくさん帰ってまいました。それをねらってかわせみがたくさん飛んで来ます。結構密度個体数は濃いと思われまます。営巣巣箱ですが、見る人が見たら「ありや絶対はいらんぞ：」って思うでしょうね。事実自分たちもはいればめつけもんって思ってますから（笑）。でもはいつたらすごいでしょうね。マスコミが騒ぐのは確実でしょうね。

そんなこんなで「かわせみの住む街・西条」という新しい快適環境都市イメージが出来ればと思っております。

これから努力する事望む事

特別な事では無いと思っております。その地域特有の個性があると思います。日常に流されその大切さを外部の人に教えてもらわなければ気付かない、その事が問題じゃないのかなと思います。御舟池を整備すると、市内の年配の方が池を見て「何を養殖してるの？」と

か「めだかなんかいくらでもおるがね」と言われます。説明するのが大変！水の大切さ、自然のすごさ、子供はもとより大人も含めて、言葉よりも実際にそれに触れる事でより深く理解出来るのではないのでしょうか？

豊かだからこそ、恵まれているからこそ、もっと豊かになるように、もっと敏感に自分たちの地域の個性を大切にしていく、それがまちづくりだと私は考えております。



近くの川で生物採集



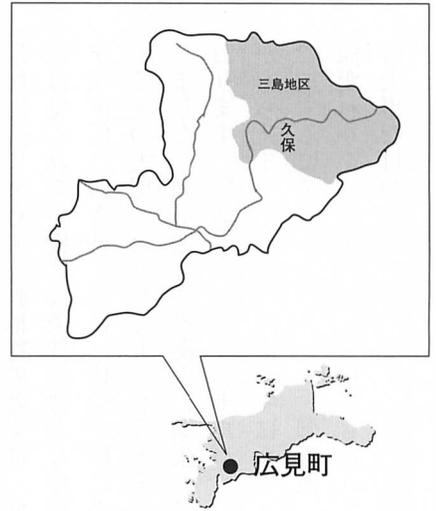
現在の御舟池

生命の川を守り 夢をえがく



広見町
広見川夢の会事務局長

葛川 熊夫



母なる川を残したい

清流四万十川、その支流として広見町の田園風景を縫って流れる「広見川」は地域住民にとって生命の川であり、この川の自然と恵みをそこなうことなく、次の世代に引き継いでいかなければならない。しかしながら近年は、河川改修工事や生活排水等によって、水質が悪化し下流の四万十川への影響も否めない現状が続いている。広見川の変貌に気付いた人々の間から「広見川はわれわれの生命の川である、この川の自然と恵みを未来に残し伝えていこう」と声が上がリ昭和六十二年有志によって「広見川をまもる会」が発足した。「まもる会」は、自然を破壊するような護岸工事に対しては、行政に意見の申し入れをした。数年が経過した平成八年には、ふる里に帰って来られた元玉川大学教授酒井哲夫先生を迎え、「広見川の夢」を演題とした講演会を聴講後「まもる会」では、今後は行政と住民が協力して更に新しい段階へと発展させることが大切だと実感した。その思いを酒井先生に託し、新グループの結成を依頼、「まもる会」の意志を継ぐような形で、広見川を世界で一番美しい母なる川にすることを目的に新しいグループ

「広見川夢の会」を平成八年に結成した。



講演会

夢は高く活動は地道に

「広見川夢の会」は、目的に向かって、夢はあくまでも高く活動は地道にと活動を始めた。

住民の意識高揚を図るため、有識者を招いて講演会を定期的に開いている。花をいっぱい咲かせ、ニホンミツバチが飛び交えば蜂蜜もとれるようになると、川の兩岸や田んぼにナタネやレンゲの種子を蒔いている。また、ホタルが自生できる環境を作るため、まず幼虫の餌にな

るカワニナを採取し、自然繁殖しやすい場所に移し替えている。悠々と泳ぐ鯉の姿も広見川の名物にしようと、酒井会長が自宅の種鯉二千匹の中から採卵、ふ化させ数ヶ所の池で飼育し、年二回稚鯉を放流している。これには地元小学校児童の協力を得ている。



菜の種子を蒔く

ふる里を思う心が繋がる

広見川夢の会は、次のような会や行事にも積極的に協力している。平成三年に発足した「広見川灯ろう流し」、「広見川盆踊り保存会」、昭和五十四年に発足した「安森鍾乳洞保存会」、平成七年に発足した「三島の明日を考える会」、平成

十三年にホタルの里づくりに取り組み始めた「広見町ホタル研究会」、平成九年から実施している「源流広見川上り駅伝大会」。平成十四年からは鉄人の部(個人)を新しく設けたこの駅伝大会も、広見川夢の会が主催して努力している。広見川流域四ヶ町村の行政が中心になって組織されている「広見川等をきれいにする協議会」とも、車の両輪の如く今後積極的

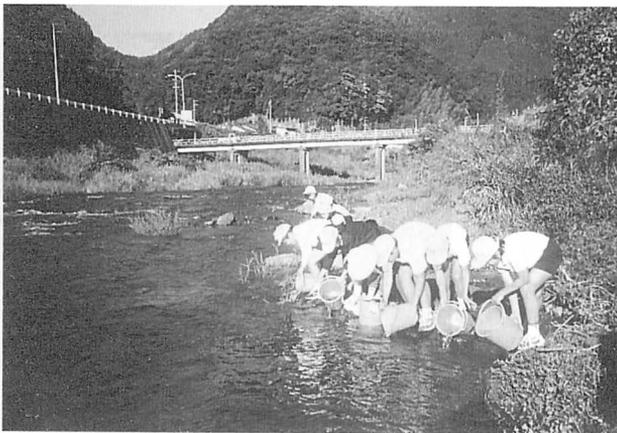
講師を囲む交流会

有識者を招いての講演会の夜は、講師と会員との交流会。ここではうちとけて更なる夢を語り合い、毎回深夜までになり、互いに感動し合うことしきりである。

日本ホタルの権威者矢島稔先生からは、広見川全域が自生息地であると太鼓判を押された。東京大学名誉教授の佐々学先生のユスリカの調査では、広見川の源流から四万十川にかけて採取した八十七種のうち、四十六種が新種で十一種が日本未記録種であることがわかった。他の講師は、岐阜大学名誉教授の安江多輔先生、玉川大学教授の松香光夫先生、愛媛県環境創造センター所長の立川涼先生、更に国土交通省中村工事事務所副所長等、会長の知友に要請、講演会を開いている。

おわりに

「広見川夢の会」では、実践活動を通して互いに感動をおぼえ、更に新しい活動の構想を練っている。会長には「川を考えるとすることは森を考えると。川を良くしようと思えば森を良くすることが必要」という考えがあり、今後の活動としては植林も模索している。「まもる会」が目指した地域の内なる活性化は、夢の会で地域の新しい魅力の創出へと発展している。



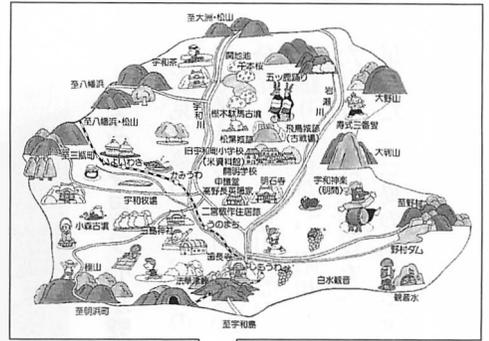
稚鯉の放流

豊かな自然を子どもたちに



宇和町
大地の会代表

上甲 俊子



大地の会の生い立ち

宇和町は、肱川の源流がある町です。宇和川の水は野村ダムへと流れ、野村ダムからは宇和島市・八幡浜市など二市八町へ、生活用水として提供されています。今、宇和川の下流から野村ダムにかけて、多量のおおこが発生しており、川の汚れが気になっています。

宇和町生活文化女性塾「卯の花塾」で、教育・福祉・環境など、いろいろな分野の学習をした中で、環境についてもっと学びたいと思い、ネットワーク「地球村」代表高木善之さんの講演会に参加しました。そこで地球環境の現状を知り、私たちに出来ることから始めようと、平成九年、卯の花塾生等女性五人で「Earth Eva h(Aースエバ)」を結成しました。三年間はとも活発に活動していたのですが、それぞれが別の会で多忙となったこともあり、休息状態となっていました。その間、八幡浜地域女性グループ自主企画イベントに参加したメンバーもいて、町外で環境に取り組んでいるグループとの交流を深めることができつつありました。

そんな折、平成十一年度にえひめ女性海外派遣へ参加したメンバーから、国の



清流のふる里 肱川水源地

補助事業で「環境」を愛媛県の統一テーマとして取り組んでみないかという誘いがありました。

宇和町だけでなく、東宇和郡内の環境グループの賛同を得て、平成十三年三月「グリーン東宇和」を結成しました。残念ながらこの事業は不採択となってしまいました。熱い思いから計画通りの活動を行い、成果を上げることが出来ました。そして、グリーン東宇和につながる宇和町の環境グループとして、Earth Eva hのメンバーと環境に関心をもつ仲間が一つにまとまり、平成十四年一月、新たに「大地の会」を会員十四名で発足しました。



講演会

グリーン東宇和の取り組み

水環境について学んでいるうちに、森の大切さにも気づきました。そこで、森の再生を手がけてこられ、野村ダム周辺の緑化対策環境整備にも関わられた横浜国立大学名誉教授宮脇昭先生をお招きし講演会「森よ生き返れ」を開催しました。さらに、日本自然保護協会会員の河野一男先生を講師として、大野ヶ原一日探検を実施し、ブナの原生林で雄大な自然の息づかいを感じ、森に対しての認識を深めました。また、東宇和郡内四町におい

て、「グリーン購入調査」として、グリーンショップ取扱商品（ダイオキシンの出ないラップ・再生紙・石けん洗剤等）調べを行い、その結果を各町文化祭において展示発表しました。

今年度は、天狗高原周辺の自然観察会と遊子漁協研修を計画しています。

大地の会の取り組み

川をきれいにしたいという思いから、今年度は「水環境を学ぶ」をテーマとして活動しています。さんきら自然塾主宰水本孝志さんの指導により、自然の素晴らしさと環境保護について学んだり、自然観察会で実際に池周辺の自然に触れました。宇和町には百三十八の池があり、たくさん動物が棲息していました。自然豊かな町であることに驚き貴重な体験をすることができました。また、川の汚れを知るために町内各所の河川や水路の水質調査を行い、川の様子を実際に見ることで、各家庭からの生活排水が川を汚していることを実感しました。

毎日出される米のとぎ汁はそのまま流すと汚染源になります。EMで発酵させると浄化源に変わります。今後は、各家庭でできる川の浄化活動の一つとして、この「米のとぎ汁EM発酵液」を広めて



多様な生態系のある越前池にて自然観察会

いきたいと思えます。さらに、全国一の照葉樹林都市である宮崎県綾町へも視察研修の予定です。

「森と海の共存」森の自然の豊かさが海の豊かさにつながっているということから、森と海をつなぐ川をきれいにすることが、私たち人間も動物も、生きていくものすべての豊かさにつながるのだと思います。今、川を汚している私たち自身で、水辺環境を守る努力をしていかなければなりません。これからの子どもたちに住みよい生活を残せるよう、豊かな自然を守っていききたいと思えます。

『万物の根源は水である!!』



八幡浜市
八幡浜さんきら自然塾

代表 水本 孝志

〔佐田岬半島生物研究舎／愛媛県環境マイスター〕

私には、物心がついた頃から「水」に対して特別の想いがあった。何の事は無い、私の名前が「水本」だから！ 生家のすぐ近くに私の村の水源地があり、「おいずし」金山出石寺が鎮座する出石山からの伏流水がコンコンと湧き出し、清流指標のシマアメンボが泳ぎまわり、夏にはでっかいスイカが浮んでいた。じつちやんの「水の出る家じゃけん、ウチは水本のがぞ！」という言葉は実に説得力あり、何だか自慢したい姓に思えたのだが、中学校にあがると、もういけません！ 悪友が、「水飲み百姓」という田舎では、凄く破壊力のある呼称を持ち出してきて、とうとう私の「あだな」に定着…。以来、水臭い・水もの・水泡に帰す・水商売なんぞのマイナーワードを耳にするたび、私はクシユンと落ち込むばかり。しかし高校生になって、古代ギリシャの科学者にして哲学者・タールレスの《万物の根源は水なり》という素晴らしい格言に出逢い、私は再び自分の名字にエヘンと胸を張れるようになったのである。「よし、全ての過去は「水に流そう！」そして「水も滴るイイ男」になって可愛娘ちゃんをゲットするゾイ！」とばかりに、すっかり「水本」君に惚れ込んでしまった。今や水は宇宙の彼方から隕石によって運ば

れた「命の源」として、誰にでも認知される時代になった。我ら傲慢な二足獣に裏切られ傷つけられても、限りなく優しく抱いてくれる、大いなる母：水惑星地球号に対し本当に申し訳なく、反省と感謝の気持ちでエコアクションにトライする今日この頃である。

さて、佐田岬半島の水系を概説してみよう。八西地区には一級河川が一本も無く、合計三十七本の二級河川があるのみで、化石燃料の贅沢な使用による地球温暖乾燥化も相まり、水量の乏しい甚だ脆弱な水系である。飲料水や農業工業用水の大部分は、遠く野村ダムからの南予用水に依存している。又、砂防ダムや堤による魚類（アユ・ウナギ）や甲殻類（モクズガニ・ヒラテテナガエビ・ヤマトヌマエビ）の回遊阻害と、海岸の砂浜後退問題も甚大である。尚、佐田岬半島が県下に誇る三大ラグーン：潟湖（阿弥陀池・亀ヶ池・龍王池）と各地に点在する小規模な溜め池では、埋め立てによる水辺植物の物理的消失、ブラックバスやブルーギル・オイカワ・錦鯉・ウシガエル・アカミミガメ・ゲンジボタル等の娯楽本位の身勝手な放流による、在来水棲生物の駆逐圧迫化が、急ピッチで進行している。



愛媛の“レーチェル母さん”による海洋汚染の科学的解説

このような各水系の現状を広く訴えるため一九九八年に結成した「さんきら自然塾」では、二〇〇〇年に『八代ミズスマシ隊』を特設し、愛媛県河川里親制度に登録後、八幡浜市八代川の保全活動に汗している。闇雲にアシ原を刈り払う他の里親団体と異なり、『ゴミとは人間が棄てた人工物』との認識を徹底させ、邪魔もの扱いされるアシやダンチクがチツソヤリン等を、ミゾソバが重金属を吸収してくれる優れた「バイオ・フィルター」であること、川べりの樹木が沢山の水棲生物を育んでいる事実を、川の中を素足で歩いての自然観察と科学的スライド講義で子供たちにも分かり易く解説し成果を上げていく。又、二〇〇二年度からは半島全域の海洋汚染に取り組むべく、「百回のシンポより一個のゴミ拾い」を合言葉に『渚の海燕隊』を発足させ、本格的な『ビーチコーミング』を展開中である。先ず、タイドプール（潮溜り）の生物観察を通して、海を一生懸命浄化している

地球の仲間と友だちになる。次に美しい貝殻やクラフトにもってこいの流木等の「お宝探し」と共に、様々な漂着物を拾い集める。そして海を穢し生物にダメージを与える人工物の詳細な分別と環境評価をすることで『面白納得学習清掃会』にもってゆくことが最終的な狙いである。他人が棄てたゴミを拾うには、かなりの抵抗があるものだが、「友だち…海の生物」が大いに助かる実態が分かれば、進んで拾えることを体感してもらっている。去る八月十九日に諏訪崎の海岸で開催した八幡浜市の『緑の少年団』とのビーチコーミングでは、流れついた一個のソフトボールをめくり、「あの時、僕が川に落としたボールかもしれないぞ!」等、様々な声があがった。各河川の上流域の学校児童たちが、産卵のために海に下ってきたモクズガニの如く浜に戯れ、「山のゴミはやがて海に届く」との新鮮な自覚がめばえたようで、大変有意義な一日だった。

冬、北風に煽られ佐田岬半島の瀬戸内海側沿岸には、夥しいカキ養殖用パイプが広島方面から流れ着く。夏、南風に乗って宇和海側がゴミの山となる。各種プラスチック製品・紙オムツ・鏡台・レジンペレット・コンドーム・葉菜・集魚用



透明電球・ハンゲル語の空き缶・エボシガイ付着の中国漢字名入瓶・卒塔婆・仏壇・etc:地球上で唯一ゴミを出す生物…人間の素顔とモラルの程度、文化文明の成れの果てが、醜く破損し強烈な腐臭を放っている。

そんな光景に思わず顔を背ける自分も人間の一人であることに愕然としつつも、私は『アナタ』と共に黙々とゴミを拾い、親愛なる水惑星ガイアの極上のスマイルに出遭える日を夢みています。

PS.※「愛媛県環境マイスター」として、各地に出張しての自然観察会・エコスライド講座を承っておりますので、気軽にお声がけ下さい。

TEL・FAX (0894) 24-4691
E-mail:sunkira@sis.ocn.ne.jp

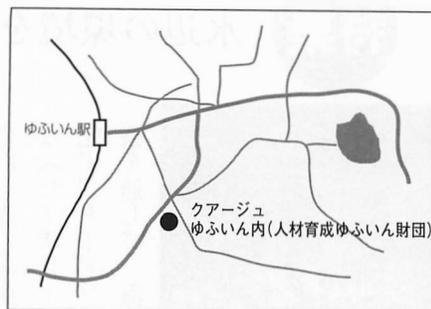
※愛媛県環境マイスター…愛媛県では、平成十三年度より、民間団体が自主的に行う環境学習活動などを支援するために、県内に在住する環境活動リーダーや学識経験者を「愛媛県環境マイスター」として登録し、各地に派遣している。

素晴らしい未来を 子どもたちにバトンタッチ



大分県湯布院町
人材育成ゆふいん財団事務局

今井 英子



財団法人「人材育成ゆふいん財団」は、人口一万二千人足らずの小さな町で行政と民間がお金を出し合って設立した小さな財団です。事業の大きな柱として『0歳から100歳まで：子供たちの未来を育む、安らぎの町づくり』を掲げ、ふれあい事業として「だいこん畑」「ふれあいのそば畑」、また昨年度には「生命の水を考える」取り組みなどを実施し、顔の見える関係を大切に、地域に根ざし、ボランティアのスタッフの皆さんと共に活動を進めています。

『0歳から100歳まで：安らぎの自然環境／生命の水について考えよう』をテーマとした事業は、昨年度から取り組みを始めたものです。私たちが生きるに当たって不可欠な「水」を中心に、生命の水を考える中で派生してくる「環境」をも視野に入れ、自然環境を守っていく大切さ、その自然を織り成す「大地」「空」「水」そして生業への興味、関心を掘り下げていけるような事業を考えています。本年度は、フィールドワーク的な参加型事業として実施し、「まるっと「川学」探検隊」を結成、水質調査等、水そのものを観察することから始めています。

また、四年前から取組んでいる「0歳から100歳までの食」では、どのよう



キレイに見える川も…？

に食べ物を育てるのか、その食べ物を育てるための自然環境や過程を学び、自らが育てた食べ物を食べる喜びをみんなで感じながら活動を始めて三年目、一歩進んで「水」についても取組んでみよう」と前述したような事業がスタートしました。

湯布院町には、まだ下水道がなく、生活雑排水が直接川に流れこんでいます。子どもたちが「私たちの川の状態はどうなってるのかな」という素朴な疑問を抱くことから、「水」を捉え、少しでも汚染されているなら、キレイにするためにはどうすればいいのかまでを子どもたち



話もちゃんと聞いてるよ

高学年の子どもたちは、思った以上の川の汚れに大人と共にびっくりし、その汚れの一番の原因が、家庭から出る生活雑排水なんだということを知って、また驚いていました。

自らの力で掘り下げて、大人と共にその解決法を考えていこうという試みが始まり、川の水質調査『第一回まるっと「川学」探検隊』を実施しました。

調査場所には、湯布院町の中心部にある城橋から中央橋までの区間六箇所を調査、往復4kmの道のりです。調査には、簡単に川の汚染度を測ることが出来る「パックテスト(COD・化学的酸素消費量)」を使用。水を汲み、川の色や匂い、温度などを記録し、汚染度をチェック。移動中には、ゴミ拾いをする子ども姿も。また、水質調査以上に子ども達が興味・関心を示したのが、川の中、川辺の探検だったでしょう。アミで「あぶらめの子ども」をすくったり、草むらのなか

にあったカメの卵を見つけたり、分らない魚や花を見つけるとボランティアとして参加していただいた湯布院の川博士とも言える二人のスタッフに聞いてはメモをとる。「川は生物もが心地よく生きていてこそ恵みの川なんだよ」という川博士の言葉に、子どもたちも何かを感じながら川について考えることができたのではないかと思います。六区間の調査が終了、水系図に調査結果などを記入。探検隊の調査は終了しました。低学年の子どもたちが多かったこともあり、水質よりも、川そのものへの興味が中心にはなっていました。川について考える第一歩としては実りある一日であったと思います。



何色に変わったかな…

子どもの中から川に親しむことが「川をキレイにしよう」という気持ちを自然に抱かせる。また、子ども達が「川が汚れている」ことを認識し、「川をキレイにするためにはどうすればいいのか」ということまで考えられる場を提供していくことがこれからさらに大切になっていくことを感じさせられました。

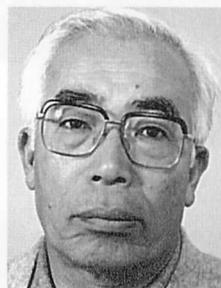
今後も年数回、『まるっと「川学」探検隊』を開催し、川についての調査を続けていきます。また、町内で「川・水」についてすでに活動を行っているグループ、団体の皆さんと連携しながらの活動も必要になってくることでしょう。

水のきれいな川、汚れた川 そして良い川とは？

—小さな生物から見た川の評価—

松山淡水ベントス研究所

主 宰 桑 田 一 男



川にすむ生物といえ、一般の人達はアユやハヤ類などの淡水魚を思い浮かべるに違いない。次いでカニやエビということになる。要するに比較的大きく、食べられるという実用性に基づくもので、当然のことと思う。

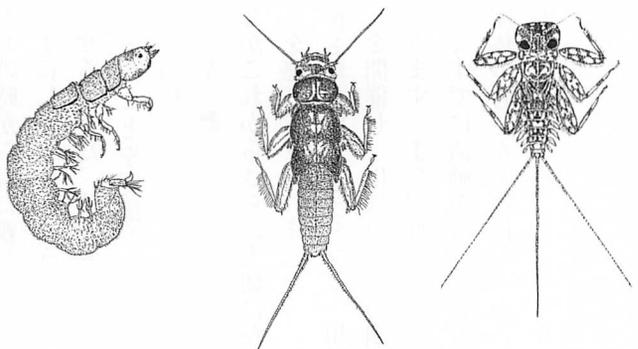
ところが、川に入って礫れきを持ち上げ裏を見ると素早く動く小動物に気付かれるだろう。何だこれは？こんなものがいたのか、と思われるにちがいない。これらの大部分は水生昆虫といわれる虫の仲間、エビやカニ、ヒル、貝などとともに底生動物といわれる小動物の集団をつくり、礫につく藻類とともに川の生態系の基幹をなす重要な生物群である。

図1は、川の水生昆虫の代表格といえるカゲロウ類、カワゲラ類そしてトビケラ類を示している。形からお分かりのように、これらはすべて幼虫で、成長すると羽ができて空中生活に入る。このほかトンボ類、ゲンジボタル、吸血するカ類、たくさん発生して嫌がられるユスリカ類なども水生昆虫である。

さて、今や環境ということばを聞かない日は一日もない。川であれば汚くなったりこわれたりしている所(不自然な所)がいっぱいある、ということである。

ところで、これらの小動物は、自分た

図1



トビケラ類
(コガタシマトビケラ)

カワゲラ類
(カミムラカワゲラ)

カゲロウ類
(シロタニガワカゲロウ)

ちがすんでいる川の現状をきわめて正確にわれわれ人間に教えてくれる。動物の種類と集まり方を見れば、その川がどんな川なのかよくわかるのである。

例えば、カワゲラ類が多ければ自然度の高いきれいなよい川で、シマトビケラ類が多いと開発が進んでやや汚れた水域であり、赤色系統のユスリカ類が多ければ生活排水などの有機物汚染が進んでいる、と考えてよい。

最近になって、筆者は大変心配な現象に出会うことが増えてきた。それは、す

ぐ飲めるようなきれいな水が流れていて見たところ美しい谷や山間部の（だれが見ても清流だと思ふ）川に虫がほとんど、またはまったく見られない場合があるということである。標高千メートルの山から流れ下りた谷で、いくら探しても、一匹のサワガニ以外にも採れなかったことがあった。水の量は正常で濁りは全く認められなかった。

石鎚山に近く、いわゆる清流といわれてきた川で、学校の理科担当の先生方十名あまりと大型のざるを使って懸命に採集したが、四匹（三種類）しか採れなかったこともある。それどころか、採れなかったこともある。しかも、採れた虫は非常に小型（若令）のものばかりであった。

このようになってきた原因が、上流域に潜んでいることはいまでもない。前述の谷では水源地周辺のブナを中心に伐採が続き、細かった林道は広げられ舗装もされた。この近くに住む御老人は、「昔は大雨が降っても川の水位は時間をかけてゆっくりと増えた。濁りも少なかった。今は、少し降ってもすぐに水かさが増す。多かつたら泥水が洪水のように流れるが、すぐに元の水位に下がる。自然林が減ってしまったからそうなった。」と話された。

山の上に裸地が増え、そこからの急峻な谷には虫がすみつくことが困難になったのであろう。あとの例の山間の川には、かなり上流に取水用の堰があり、ほとんど全部の水が近くのダム湖に取られ、水なし川同然になるが、伏流水の湧出と支流の水で何とか流れる。

一方、一車線だった川沿いの道路は次第に二車線化の工事が進み、川に近い樹木も減りコンクリート護岸も増えた。日当たりもよくなり、夏場には水温が二十八度（撰氏）以上にも上がる。

源流域には、観光地でありながら人工林も少なくない。昔つくられたスーパール林道の後遺症も残っている。

さて、図2は昔の石手川（松山市和泉）の写真だが町中を流れてきても水はきれいで、大変多くの水生昆虫が生活していた。

図3は同じ場所の今の写真である。周囲の樹木は少なくなり、右側の堤防には大木はない。水はこのように無い時期が多く、流れていたとしてもほとんど虫の姿はない。今や、川水の汚染を問題にすることと共に、川自体を無機質化し単なる放水路にしてしまったことを、どうしていくのが今後の重要な課題ではなからうか。



図3 今の石手川（松山市和泉）
2002年8月



図2 昔の石手川（松山市和泉）
1956年7月

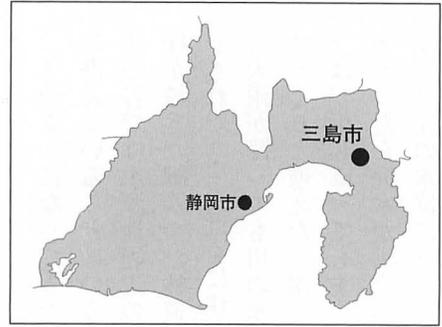
パッションで前進



静岡県三島市

NPO法人グラウンドワーク三島事務局長

渡辺 豊博



パートナーシップの難しさ

私が市民運動をしていて一番難しいと考えていることが、利害者同士のパートナーシップの形成です。まちづくり、環境づくりの成否は、まさに、この関係者同士による地域合意が、円滑に出来上がっているかにかかっています。

一般的には地域を構成している、市民・NPO・行政・企業は、それぞれの立場と利害を優先するあまり、バラバラに活動しており有機的な関係は希薄です。そのため、複雑な要因が重層的・横断的に絡み合った環境や地域問題等には、臨機応変で柔軟性にあふれた対応ができなくなってしまうです。

お互いの持ち味、特性、得意技を上手に出し合う、パートナーシップの関わり方や仕組みが、出来上がっていないのです。お互いの批判や無理解が先行してしまい、マイナスの関係に陥り、課題に対しての前向きで積極的な関係づくりができないうのです。

グラウンドワークは合意形成の処方箋

それでは、この複雑に絡んだ問題の糸をほどき、関係者・利害者の合意形成を誰が調整・仲介するのでしょうか。「グ

ラウンドワーク三島」は、まさに、この役割を担っている母集団・ハブ機能を有すNPOといえます。

様々な職種のボランティアスタッフが集まり、身近な生活現場で発生した地域問題に対して、おのおのの専門性と得意技を発揮して取組めます。効率的な課題解決に向けて、地域情報の収集・整理・分析・評価を行い、解決のための処方箋・方向性を見出していくのです。

問題を抱えた地域に居住するスタッフが、プロジェクトリーダーやメンバーとなり、問題解決のための「戦略・アクションプラン」を立案します。この過程には、スタッフ同士の徹底的な議論と多くの検討時間をかけ、活動内容の質の向上と戦略・戦術の強靱性や多様性・汎用性を整えていきます。

多くの関係者との議論と問題提起のプロセスにより、様々な視点でのアイデアや創意工夫が生まれ、合わせ、お互い同士が問題を共有しているとの仲間意識の醸成につながっていくのです。この信頼のネットワークが、NPO組織の基盤強化に連動し、組織の持続力と発展性を助長する大きな要素になっていくのです。

議論よりアクション

グラウンドワーク三島の活動が始まって、本年九月で十年が経過しました。当初八つの参加団体が、今では、二十団体となり、組織の多様性が生まれました。

実施地区は、ドブ化した川の再生、絶滅した三島梅花藻の復活、住民参加の川づくり、学校ビオトープの建設、休耕田の環境教育園化、井戸・水神さん・お不動さんの再生、荒地地のミニ公園化等三十事業にもおよび、「水の都・三島」の水辺自然環境の再生に寄与しています。また、各行事への参加者数は延べ四万人となり、十一万三島市民の四割近くが、グ



休耕田を花とホタルの里へ

ラウンドワーク活動に参加しています。小さな点が川で線とつながり、街という面に広がりを見せています。「小さなこともできない者は、大きなことはできない」「右手にスコップ・左手に缶ビール」「議論よりアクション」が、活動のモットーです。難しい議論や高邁な総論よりも、地域に起きている小さな課題に対して真摯に向かい合い、「小さな成果・実績」を残していくのです。

この事実関係が、地域住民の信頼関係を創り、パートナーシップの有益性を実証していきます。皆が寄り添い、助け合い、思い合い、支え合う関係づくりの大切さと重要性を理解することになっていくのです。

今、グラウンドワーク三島は、十一年以降に向けて、着実に「深化・進化」しています。市民・NPO・行政・企業との利害調整に徹し、黒子役として難しい役割を果たしていきたいと考えています。活動を支えるのは、「熱き情熱・パッションと創造力に満ちた行動力・アクションそして高き志・ミッション」だと確信しています。小さなサクセスストーリーの蓄積が、真に豊かな街を創っていくのです。議論と総論に溺れない、実践的なNPO活動を期待します。



8年前のゴミだらけの源兵衛川



「水の都・三島」の原風景が再生された源兵衛川

引き算型まちづくりの事始め (五)

町村の合併騒ぎも終盤に近づきつつある昨今、騒ぎが静かになった。ことが固まってしまつて、今さら何をいつてもはじまらないと、冷めた気持ちが多くを支配している感じである。引き算型まちづくりを考える中で、町村合併は、一見なじまないと思われるかもしれないが、引き算の要因として考え直さなければならぬ課題があまりにも多く、個々の要因が払拭された上でなければ、合併しても期待されるような効果が果たして見えてくるのか疑問でならない。

「このままでは地方の町や村はじり貧だ。」「今合併しておかなければ損をする。」「地方自治体として当然にもらえる交付金が目減りする。」「合併すれば無駄が省ける。」「合併すればより質の高いサービスが提供できる。」と、いいことづくめで合併が論じられ、平成十七年三月までに限定されたバスに乗り遅れるなどばかりにことが進んでいる。実態としての内容は明らかではないが、誰のための合併かといえは住民のためのそれであるとの答えは返ってくる。一方では県や国に対する国策上の手続きとして進んでいるように感じられて仕方がない。国策は国民のために存在するとすれば当然の

ことではあるが、日々の暮らしになじまない矛盾を感じるのには私一人であろうか。この度の市町村の合併は、これまで国が所管してきた多くの権限の一部を地方に移管させることにより、より効率的にかつ自治のための自立を助長するための受け皿づくりとして提起されたものが、俗にいわれる「合併特例法」である。そしてそのための合併特例債とでもいえばよいのか、財政支援の時限的な枠組みが整備されるが、分権の受け皿として地方自治体が管理できる自治の領域は全く見えてこない。多分に合併の進捗が見極められた後に個々の規模に応じて答えが出るのである。二十一世紀の地方における自治体の経営は二十世紀の延長であつてはならないことを思うと、合併が目指す新たな自治としてのまちづくり論は耳にすることができない。

今日、日ごとに企業の中からの内部告発が不正を暴き、これまで日本をリードしてきたトップ企業が国民の信頼を裏切り、国民は何を抛り所に安全や安心を求めればよいのか分からなくなつてしまつた。初号に書いたように、社会正義が失われたとしかいいようがないが、見方によれば行政に対しても多くの不信が漂つてはいないだろうか。

今私が一番に心配したいことは、これまでの市町村の自治が財源を国に依存し、指導という名の下で国、県によってコントロールされてきたことである。市役所、役場と呼ばれる行政組織と、そこに働く職員は全体の奉仕者として地域住民の暮らしを守る責任を第一義にしなければならぬにも関わらず、国、県の出先機関にも似た役割を保持せざるを得ない立場に墮落してきたといつても過言でない。通達行政などと呼ばれてきたのはその証である。法律を守り、通達に従う、さらにはこれらを日常の事務のマニュアルにさえして来たし、実務を縦割り行政と呼ばれる中に位置づけてしまったのがまた今の市町村の姿である。いわゆる「国、県への視点」はあつても、「地域住民のための視点」がトレーニングされていない。合併後も同じ価値観で行政事務が経営されるとすれば、組織は大きくなつてもサービスの質は何ら変わりはない。巷でささやかれるように不便さばかりが露呈しそである。

行政改革が叫ばれて久しいが、何時の場合も改革大綱が策定されるばかりで、改革にはほど遠い結末を見続けてきて、今回の合併騒ぎにもこうした不安はつきまとつている。町村合併とは言葉を換え

れば自治体行政の改革であり、行政組織の改革であり、そこに働く行政職員の意識の改革でなければならぬが、こうした議論はほとんど聞こえてこない。

こうして合併にかかる不安要素を列記していくと、あたかも合併そのものに反対しているかのような誤解を与えるかもしれないが、合併そのものを否定するものではない。むしろ必要に応じて広域化した行政事務がスムーズに処理されることは当然のことである。ただ、負の要素として、合併を直前に正しておきたいこと、処理して置かねばならないことなど、ハード、ソフトの両面にあまりにも多くの課題が山積している。このまま平成十七年四月を迎えるとすれば、仏作って魂を入れずの喩えにもなりかねない。

その一例は、そもそも合併の動機、根拠が、地方自治体における財政事情の悪化の中で、そこからの脱皮を図るために、合併によって合理化、効率化を図り、財政の特例措置を受けなければならないということが最大の理由になっている。

今引き算したい負の要因には、経済成長からバブルの時代に身につけた贅肉を落とすことが何より重要であるにもかかわらず、行政サービスの多くのジャンルで、既得権の保持として執行されている

はずである。前述の行政改革はこんなところで生かされるべきものであろうが、容易には取り組まれない。なぜ取り組まれないのか。住民からの頑なな要求のもとで挫折するのか、地域への利益誘導として議会ががんばるのか、否そうではないであろう。行政組織自体に取り組もうとする気迫が全く感じられない。

地方自治法に定められている支出負担行為からはじまる公会計の流れを見ればわかるように、予算の執行のあり方には膨大な人件費が伴っているといった認識は、行政組織の中に身を置くものには容易に見えてこない。例えば一百万の買い物にどれほどの手間と時間を要するのか、およそ考えられたことはないであろう。その手続きは、百歩譲ってこうした矛盾に気がついたとしても、法律や規則、そして要項等に定められているとすれば、それに従うことが公務員の当然の義務になる。さらにこれらの一部の改正を申し出ようものなら、それぞれの所管が異なり「大きなお世話」とばかりに拒否される。悶々とした気持ちで二年もすれば人事異動で担当を外れるし、後任者への引継は曖昧になってしまう。こうした日常の出来事が行政の常識になり、この常識を維持するものが公務員であるとすれば、

地域住民から見ればとんでもない非常識

になってしまふ。

十年一日のごとくして、こうしたことが繰り返されるとすれば、役所の中では簡素化もできないし、改革は進まない。今でも支出伝票にカーボン紙を挟んで複写し、多くの印鑑を押さなければ支払いができないとか、他県の実例ではあるが未だFAXが置かれず、郵便に依存しなければ文書も送れないといったことが事実である。進んだ町では、日々の支払いをパソコンに入力し、電子決済で自動的に支払いが処理される時代の中にあるが、こうした事務的な改善すら一向に進まない。さらに困るのが、こうしたことが若い職員から提案されながら、上に向かう過程で潰されると言った体質が、今日の行政を支えているとすれば、みなさんはいかがされるだろう。

こうした日常のやるべきことをやった上で合併論議を深めて欲しいものである。合併の前に整理しなければならぬ課題の拾い出しなど、合併協議会の事務局が抱える事務は少なくない。そして、これらの事務は上からの命令でやるものではなく、行政事務の全てを付託されている職員の事務であることを銘じて欲しい。

内子町 岡田 文淑

秋の空を見上げると、ついつい外へ出かけたくなります。この季節の森を歩く楽しみは、生きものたちの冬の準備を観察することです。木々の枝先の冬芽、越冬のための渡りや衣がえ（換羽）をすませた野鳥に出会うと、四季のある土地に暮らす喜びを感じます。

私は普段、子どもから大人まで様々な方に自然を紹介する仕事をしています。身近な自然の存在に気づいてほしい、好

す。

ところで植物には、葉への日当たりを良くする工夫、花が咲いたことを虫に知らせる工夫など、その植物なりの生きる知恵があります。このような植物の工夫はしばしば形や色に現れ、例えば種子については、タンポポのように軽い絹毛を持ち、ふわりと風に乗って運ばれるものや、目立つ色の果実をつけて鳥におしえ、遠くまで運んでもらう（果実を鳥に食べ

身近な自然が教えてくれること

松山市

斎藤 智子



きになってほしいという思いから、自然あそびのプログラムを開発し、できるだけ街に近いところで実施しているのです。街の中には自然がないと思われている方が多いのですが、そうでもありません。街路樹には毎年花が咲き、種類によっては虫が訪れてにぎやかですし、果実の時期には大小さまざまな実を結んでいます。公園の樹木も、四季折々の顔で私たちに季節の移り変わりをおしえてくれていま

られた後、消化されなかった種子が糞と一緒に排泄されることで散布される）ものがあります。植物のつくりだす色のコントラストや無駄のない形には、ただただ見惚れてしまい、時のたつのを忘れま

す。ですから私が案内役の講座では、ほんの数メートル進むのに一時間以上かかってしまうこともしばしばです。また、松山城山の森では、植物がバランスをとって共生している様子を見るこ

とができます。これは個々の植物の競争の結果でもあるのですが、森全体として見れば、背の高さや葉のつき方などの異なる樹木が適度に混在し、一つの調和した世界となっています。一度根をおろしたところから動くことなく一生を過ごす樹木が、周囲の生きものとのどのように折り合いをつけて生きているのかを知ることとは、人と人との関係、人と自然との関係を考える上で役立つ知恵ともなるでしょう。

皆さんも、自宅や職場から歩いていくところに自然と触れあえる場所を見つけてください。そして、日々訪れてください。するといつの間にか、美しさの基準が変化したり、バランス感覚が磨かれたりして、毎日の暮らしに潤いがあふれてくることでしょう。そして、その変化は、人と自然との共生や地域の環境づくりを考える際に大いなる影響を与えるのではないかと、仕事を通じてお会いする方々との会話から感じていきます。

「ようそんな都会からおいでたな〜」
今でも言われる決り文句です。神奈川県
の横浜市で生まれ育った私は、七年前に
小田町在住の嫁さんに引つ張られて？小
田町に移り住みました。

とりあえず戸籍上は小田町の住民にな
った私も「名実ともに：」となるにはさ
すがに時間がかかりました。自宅兼店舗
で長年営んでいる衣料品店を継いで経営
することになったわけですが、まず言葉

酒席があるので、言葉を覚えるのも皆さ
んと打解けるのも案外早かったように思
います。今では三歳の息子と小田弁で言
い合っています。

商工会青年部員としては一昨年、商工
会青年部主張発表大会の全国大会で最優
秀賞をいただきました。中四国予選以来
ずっと参加してくれた愛媛県全域の青年
部員百人の大応援団と共に喜びを分かち
合う事ができた素晴らしい経験でした。

よそ者の的小田町生活

小田町 市川 寛



がわからなくて困りましたね。お客様：
「この靴下、ちいとみぞい（短い）けん
ど、のぶ（のびる）じゃろう？」私：
「????」という具合です。

まあ、はじめは困りごともなくたくさん有
ったわけですが、小田町の人たちの暖か
い人情のおかげで笑って乗り越えてこら
れました。私の「小田町的生活」の場合、
地元の商店街や商工会青年部への加入、
公民館行事への参加などでしょうっちゅう

発表では私の小田町的生活や青年部活動
などについて述べたほか、商工会の中心
市街地活性化事業の研修で秋田県を訪れ
た際に訪問先のS.Cの理事長からいただ
いた『よそ者・バカ者・若者が街を変え
ていくんだ』という言葉に感銘を受け、
まちづくりや自店の改革に意欲が沸いた
話をしたのでした。

実際、「よそ者&バカ者&若者」の私
は「自分だからできる発想」を念頭にお

いて街づくりに参加していきたいと考え
ています。わが小田町も本年三月に第三
セクター街づくり会社を立ち上げ、現在
TMO事業主体としての認定を受ける準
備をすすめています。私が小田町に來
て初めて体験し、案外地元の人たちは忘
れている小田町の良さⅡ手付かずの自然
や農村風景、人情、地元の食材や料理な
どを掘り起こしてその魅力を町内外に広
める作業や、ITを活用した「田舎だけ
ど便利な街」づくりによって若者定住を
促進することなどを今後のTMOの事業
計画に盛り込んでいきたいと取締役の一
人として考えております。

現在、県内各地で市町村合併がすす
められています。合併によって行政区と
してはなくなってしまうであろう小田町
の良さを、活かし、守り、発展させてい
くことに「小田まちづくり株式会社」が
寄与できたなら、私の「よそ者の的小田町
生活」もさらに充実したものになるでし
ょう。E-mail:sun@usehime-tinet.or.jp

水辺が教えてくれること

— 環境を想う心育てよう —

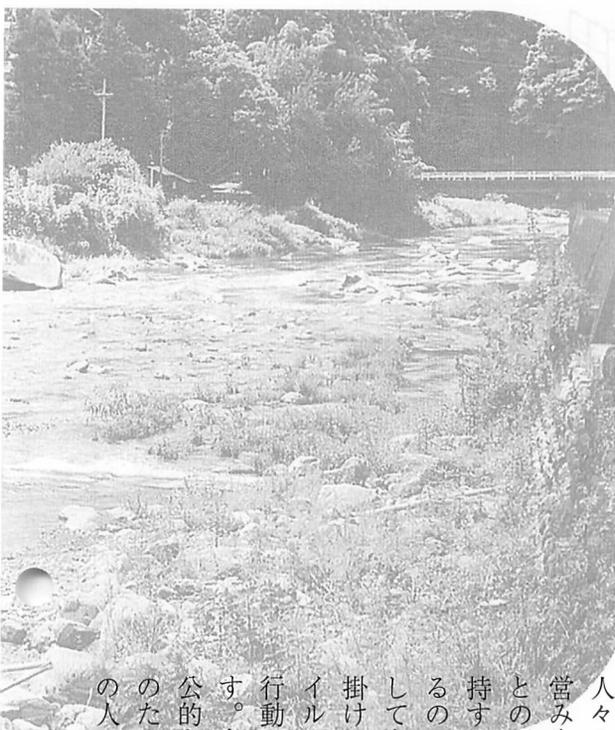
えひめ地域づくり研究会議運営委員

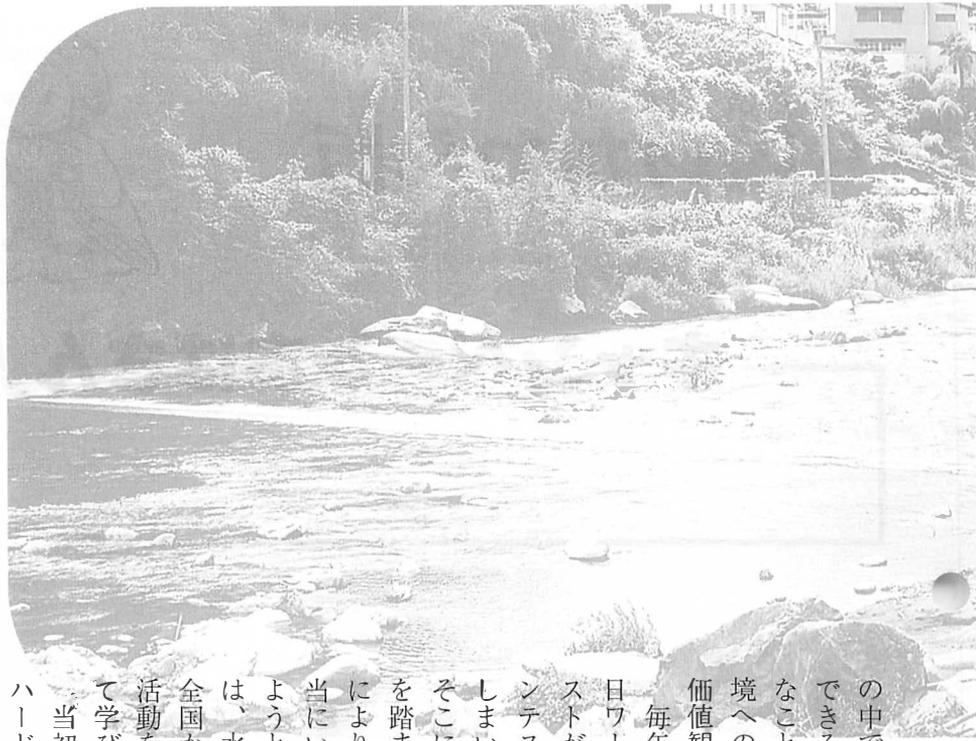
宇和島市 山田 佳代



今日では、環境の存在が永久ではないことに、世界中の大多数の人々が気付いているでしょう。「環境」という言葉は、人々の日常の暮らしからあらゆる生物の営みまでを意味しています。全体と部分との調和を図りながら、最良の状態を維持することが「持続可能な開発」と言えるのです。しかし、いくら技術的に整備しても、環境により良くあるための働き掛けは、結局は住民の習慣とライフスタイルに依存しています。住民が主体的に行動して初めて環境改善が行われるのです。多くの市民団体や草の根運動団体、公的あるいは民間の企業が行う環境改善のための活動があるからこそ、より多くの人々が環境問題へ関心を抱くようにな

つてくるのです。重要な環境の要素であり、すべての生物が生きていく上で欠くことのできない「水」について考慮することは、共同体の中にある個人に課せられた責任ではないでしょうか。市民活動においても行政においても、水辺に関するまちづくり施策は最も進んでいるといわれています。これは、水辺が地域住民の心を映し出す鏡だからでしょう。水との関わり方は、私たちが住んでいる地球の環境にも大きく関係してくることで、現在の生活がどれだけ環境問題を引き起こしているかを一人一人が認識した上で、私たちが身近にできること、やらなければならぬことを啓発することにより、毎日の生活





の中で生じる環境に関する問題を、解決できるような人々を育成することは重要なことです。一人一人の毎日の小さな環境への配慮が、やがては他の人の選択や価値観を変えることに繋がるでしょう。

毎年七月に東京で行われている「川の日ワークシヨップ」という公開型コンテンツが、今年で第五回を迎えました。コンテンツといっても単に優劣をつけておしまいという安易なものではありません。そこに至るまでの知恵と汗と情景と全てを踏まえて総合的に公開で議論することにより、川のタカラモノに光を当て、本当にいい川とは何かを参加者全員で考えようという素晴らしい企画です。ここには、水辺に関わっている様々な人たちが、全国からやって来ます。そして、日頃の活動を発表し合い、産官学野の枠を越えて学び合おうのです。

当初、ソフト中心の「いい川」部門とハード中心の「いい川づくり」部門に分かれていたのですが、次第にその垣根がなくなり、とうとう今年は一本化されました。かつては行政の仕事だった整備事業も、今では市民活動との協働作業となっているのです。これは、行政に対して常に建設的な提案を行ってきた市民活動の業績の積み重ねにより、徐々に整えら

れてきたパートナーシップです。お互いの自立に基づいているが故にうまく補完し合い、お互いの立場を尊重しつつ役割分担を決めています。そして、実際に水辺が、そしてまちが変わってきているのです。これこそまさに市民による市民のためのまちづくりではないでしょうか。

それぞれの地域の特色は、その地域固有の風景を形づくっている「環境」に依拠しています。それを当然のものとして見過ごすことなく、きちんと評価していくことが大切なのです。環境を見る目はそのまま地域に愛着を覚える人のライフスタイルに注がれ、環境との付き合いはその地でどのような生活像を構築していくかという問題に行き着きます。これはまた、まちづくりの最終的な課題でもあります。

まずは、そこに行ってみて触れて、感動を共有することから始まります。楽しい毎日が送れるように、人々が触れてみたくなるような魅力的な風をおこしていきましょう！

ひめ 媛のかわら版



キャンペーンおばさん!

松野町 隅田 深雪

例年に無い暑さに耐えながら、涼しい秋は来るんだろうかと思わせた夏も過ぎ、滑床は夏休みの喧騒も嘘のようにすっかり秋本番を迎えています。

本誌の担当者さんの懐かしい声にほだされて簡単に原稿を引き受けたのが数ヶ月前、明日あしたと延ばし続けて、小学生の宿題のごとくメ切りぎりぎりに追いつき込みに入って、台風のような「ごーごー」とすごい水音を聞きながらキーを叩いています。

私が「森の国 松野」に来てから早いもので五年目。

名古屋生まれが四国土佐の地に流れ着いたのが、二十数年前(若かったな)、伊予の地に脱藩もどきで、今は滑床街道を右往左往!

前職場も町営の施設でしたが、民間委託に移り会社の方向性と相容れぬものがあり、やはり地域ががんばる施設で働きたいとの思いが強く、公営の施設の先駆けである「森の国ホテル」に入社しました。

「森の国ホテル」は平成三年にオープン、松野町一〇〇%出資で(財)松野町観光公社が委託運営しています。足摺宇和海国立公園の一角「滑床溪谷」に立地し、年間一万二千人程の方に宿泊して頂いて

います。

子供の学資の足しにと軽い気持ちで始めたこの仕事、今は「営業マネージャー」の肩書さも軽く背負って夏痩せもしない重い体重で、日夜がんばっているつもり。



森の国ホテル

年間百四日の公休消化は七割弱、八月の手当てなしの残業は三桁に近く、独り身だからできるのかと、「男女共同参画社会」を頭に描く昨今です。

入社半年で「営業マネージャー」となり、それまでの人脈をフルに活用し、「営業方針」は各種会合への積極的参加、人

的ネットワークの構築を柱とし、従来の観光施設の営業のエンジン周りは皆無に近く、フットワーク軽く動くのを信条にしています。内部ではまたの名を「キャンペーンおばさん」と呼ばれています。各種委員、パネリスト、講演等は頭脳明晰×、冷静沈着×、そんな私ですが依頼の時は興味深々で従来のチャレンジ精神が頭をもたげ、ふたつ返事で軽く引き受けて本番近くは悩むと言うのがいつものお決まりパターン。しかしながら生来の「極楽トンボ」で、講演は原稿無し、当日の皆様方のお顔ぶれを見てから話すと言う、度胸の良さで何とか突破。

「度胸の良さ」のお陰でしょうか、皆様から声をかけていただき、出会いのチ

ャンスに恵まれています。そのチャンスに逃す事無く、最大限に利用するのが営業と考えています。

それに加えて私の大切な勉強の場は、松野町観光公社が事務局を担当している、西四国観光ネットワーク「るーらるるげつと」です。

愛媛県、高知県の民間・公営の観光施設七つで「観光に県境は無い」を合言葉に活動しており、今年で四年目です。

国、県、市町村の観光担当者、各界で活躍されている方にオブザーバー・顧問をお願いしまして、ご指導を頂いています。

ネットワークは参加するだけの寄りかかりの体質では何も生まれない、自分たち現場があくまで活動の中心であり、ト

ップダウンの企画ではなく、現場の担当者が中心となり研修会、イベント企画等をすすめています。

一年に二回「るーらるるげつと情報交換会」を開催しており、毎回五十人程の参加者の方のフリートークで盛り上がります。参加者皆様を介して、七施設のファンを増やしていきたいと思えます。

夏の現場中心も終わり、秋のキャンペーンに突入します。大好きな滑床溪谷、森の国ホテルにたくさんの方にお越しただけのように、前向きにがんばりたいと思います。

皆様も是非ともお越しくださいませ。

～秋の滑床 風便り～



滑床溪谷

次回も引き続き隅田さんに

登場してもらいます!!



日本の滝百選にも選ばれている雪輪の滝

みちのくひとり旅

みちのくひとり旅

研究員 池田 大作

さて、今回の話題は東北編！

先進地視察 山形県寒河江市

七月十一日、山形県寒河江市J Aさんが西村山に御じやました。お話を伺ったのは生活部長の「工藤順一」さんです。山形版西田敏行とでも申しませうか、何とも言えないキャラクターです。

山形県と言えば・・・「さくらんぼ」。誰もがこのことを知っているといます。この「さくらんぼ」などを利用して地域づくりに取り組んでいるのが、寒河江市なのです。

また、官民が一体となって周年観光農業に取り組んでいます。特筆すべき点は、農業のプロは農協！行政に、文句を言わせなかったことです。行政をうまく利用した結果が、今日の寒河江市ではないか

と思います。それと、良き上司に恵まれたことです。何事も一人ではうまくいきません。上司の方々の理解を得られ思う存分、仕事に専念する環境があつたからこそ、数々の商品の開発ができたのだとおっしゃっていました。

景観を活かした商品や旬のもの、アイデア商品、一年を通してこれだけのものを提供しているのも珍しいのではないかと思います。しかし、成功の陰には様々な苦労があります。信用されるまでの長い道のり、お客さんの反応。ちよつとしたことも聞きのがさず、活かすこと。日々の努力の大切を教えられました。

さて、次は東北最大の道の駅「チェリーランド」に立寄りしました。平日にも関わらず大勢の観光客に唾然としました。観光地に行くとき必ずといっていいほど、見受けられるものがあります。ご当地名産



東北最大の道の駅

アイスまたはソフトクリームです。ここにもありました！バラ、さくらんぼ、米などを使ったソフトクリームが約百種類。味は甘さ控えめで後味もさっぱりしていてとても美味しいです。

山形に行くことがあれば、是非お薦めしたいところです。年中何らかの催しがありますので！



全国自治体学会エクスカーション

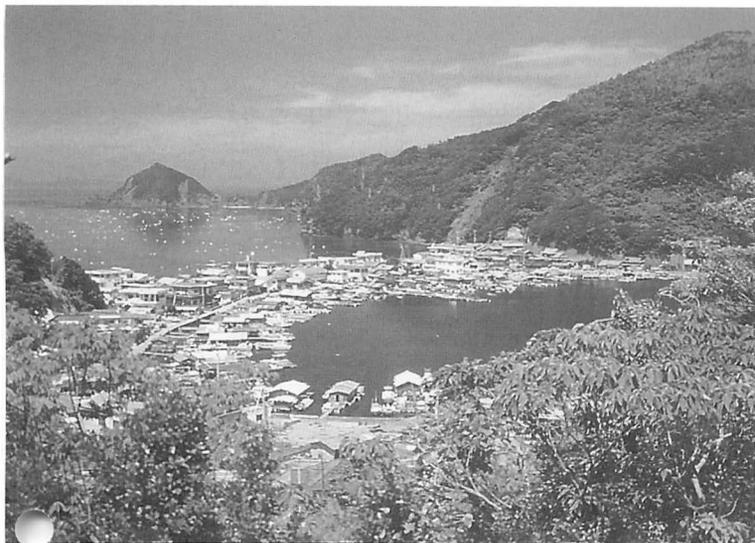
三春町

第十九回全国自治体政策研究交流会議及び第十六回自治体学会・ふくしま郡山大会が八月二十二日から二十四日の間行われました。エクスカーションは二十三日夕方から翌二十四日午前中まで。参加者は、地方公務員が中心でした。大会終了後、リムジンバスで三春町に移動したのですが、道中のバスガイドが三春町長で、失礼かもしれませんが、東北弁で話すから普通の話でも面白く聞こえてしまいます。独特の発音・・・あつという間に、本日の宿泊先「田園生活館」に到着。さっそく交流会が行われました。

あいにく曇天のため、天体観測はできませんでしたが、藁葺屋根の元四季菜というところで意見交換会を行いました。二十四日、三春町を探索。始めに三春町立桜中学校を訪れました。とても驚いたのが、教室があつて教室がないことです。何が言いたいのか？と思われる人が多いと思いますが、私は今までこのような方式で授業をした経験がないため驚きました。それは、教科教室型です。全て科目ごとに教室が違います。普段は、ホームベースというスペースで休憩や次の

授業の準備をしています。個人ごとにロッカーもあります。また、モジュール学習として定期的に二十五分単位の授業を実施していることです。例えば、実験や調理実習の場合、五十分では時間が足りず、授業が煩雑になってしまいます。しかし、モジュール学習を取り入れることによって、二十五分単位の授業を複数組み合わせ、七十五分や百分の授業を可能にしていることです。生徒のための環境づくりがとてできていて感心するばかりでした。その後、三春ダムなどを見学。そして、国際交流館「ライスレイクの家」へ。三春町は、アメリカ・ウイスコンシン州ライスレイク市と姉妹都市交流を行っています。交流館は、交流六周年を記念してライスレイクの方々の協力により、ごく一般的なアメリカの家庭生活を体験してもらおうと考え建てられたそうです。宿泊も可能で、一人六千円。カップル(二人)で泊まると一万円。最近、夫婦仲がイマイチ・・・恋人とケンカ、仲直りしたいと思っっている方！お薦め！！

これからの観光産業は、「造る」のではなく、「創る」ではないかと思えます。資源はどこにでもあります。問題は、活かすことができるかどうか。外から見ることの重要さをあらためて痛感しました。



“MY TOWN,” うおっちゃんぐ

歩キ目デス & 足ラテス

第21弾

津島町ウォッチング・パート1

「ここはバニーランドか!?!」



岡崎 直司

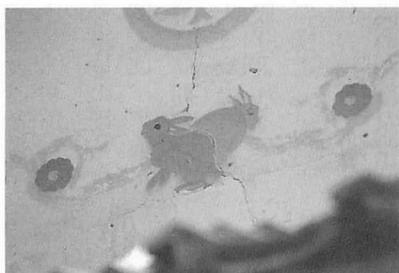
津島町は、宇和島市の南に位置するが、何故か目下は北宇和郡。それにしても広い面積の町である。二百二十一平方キロメートルは、市域である松山、大洲、西条に次いで堂々の第四位で、南隣する南宇和郡全体の大きさにほぼ近いくらい。だから、この町を一口にウォッチングと言っても、そうた易くはない。これまでに訪れた何度かの機会をパッチワーク的に集めてみた。

まず最初はこの美しい集落から。中心部の岩松から海岸沿いを十分程西へ走ると、大日堤（おおひさげ）小日堤（こひさげ）という地区がある。その内地形的に珍しい砂洲上にある集落が、紹介したい小日堤浜（こひさげはま）だ。県内では、佐田岬半島の伊方町亀ヶ浦や三崎町の阿弥陀池辺りにもあるが、中でもこの立地は際立っている。写真で判るとおり、狭い砂洲上にビッシリと家が建ち並び、左側が宇和海、右側が内海の北灘湾につながる。小日堤という一風変わった地名も、恐らくはその自然堤防で仕切られた小さな湾の形が「瓢（ひさご）」に似ているので付けられたのではないかとウォッチャーはニラんでいる。初夏の照り付ける太陽の下で、ベタ風の海面に遠く真珠筏が浮かび、まるで地中海の如

きワンシーンだった。カラーで見せ出さないのがホント残念。

次にご紹介するのは、この集落で見つかった鏝絵。役場の方が見つけて下さった。斧家の妻壁に、

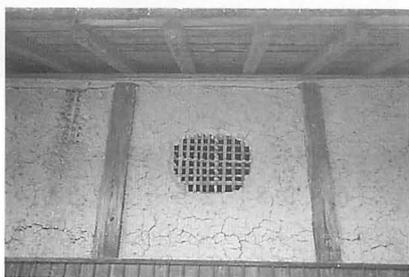
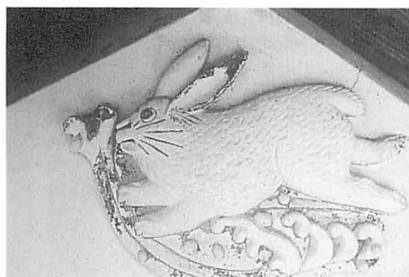
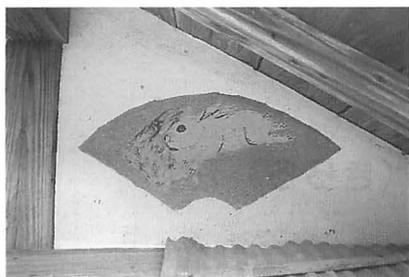
紅殻（ベンガラ）の濃淡で二羽のウサギが描かれている。紅色と淡いピンク、背景が白壁のため、紅白のウサギをこう表現したものか。花筏風にあしらってあるのは、アカンサス（西洋アザミ）の葉で、和と洋のデザイン処理が面白い。中央に家紋の橋（たちばな）をあしらひ、なかなか凝った画面構成だ。よくよく見れば、屋根の上方棟瓦の押さえの位置には恵比寿面の漆喰飾りも



付けられている。

別の日、今度は内陸に入り増穂地区を探索中、元井ノ川の河野家で、またまたウサギの番（つがい）を発見。妻壁に左右一対の扇面を置いて、紅白のウサギを描いている。見つけにくい場所であり、我ながらよく視野に入ったものだ。時々、鏝絵の神様が声を掛けてくれるらしい。前述のウサギと手法が似ているので、同じ左官職人の作か。残念ながら、製作年と作者共に不明である。

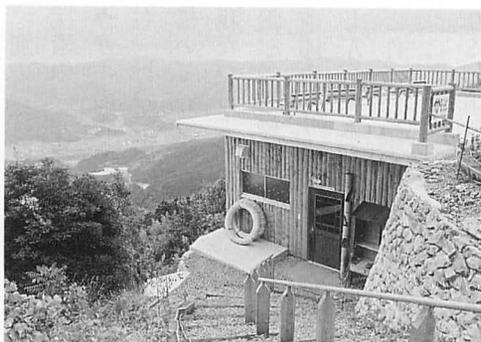
ここまで来れば、もう一つ紹介したくなる。山財の馬ノ淵にある山本家のウサギ。こちらは土蔵の妻壁で飼われていた。



波があしらってあるので、「波ウサギ」という図匠になる。実は、大きなスズメバチの巣があり、絵柄が隠れていたのだが、はずしてイイということになり、やっと下から現れたのがこのウサギ。でもチョイト太り過ぎ。これでは波に沈んでしまふ、いや、逆に浮くかも。ナンテことを考えながら、しかし、前段二例のウサギとは完全にタッチが違うので、これは別な左官職人に違いない。それにしても、津島ではやけにウサギが好まれる。次に、津島でよく見かけた「下地窓」について。建物の土壁の場合、まずその内部に「小舞竹（こまいたけ）」と言って、

割り竹を格子に組み、その上に壁土が塗られる。その竹格子が下地なんだが、通風のための換気窓として、土を塗らずにそのまま窓とした下地窓。この町では、納屋や倉庫に用いられているのがまだよく残っている。最もグレードが高くなると、茶室の下地窓ということになって、それは意図的に農家風に見せる侘び寂びの世界だから、その原風景がこうした地域で見られるのは、ナンダカ楽しい。やっぱり津島は広い、ウォッチングネタが一回ではとても尽きそうにない。次の続編もお楽しみに。

● 媛のくにフラッシュ ●

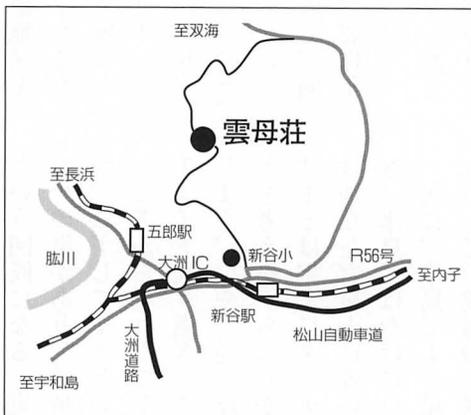


「雲母(きらら)荘」

大洲市

大洲市柳沢で地域づくり活動をされている「木林森夢クラブ」。みなさんの長年の夢が叶いました。同地区から大洲市街を一望できる展望交流施設「雲母(きらら)荘」を自ら建てられ、今年5月に完成しました。

市街の夜景、夏の花火、これから冬にかけては、眼下に壮大な朝霧の雲海を見ることができます。



11月24日(日)にはここで雲海まつりが開かれ、雲海を見ながらおいしいしし鍋をいただき、ぜいたくなひとときを楽しむことができます。いっぺん来なはいや!

《問い合わせ先》 柳沢公民館 TEL (0893) 25-2400



水仙の球根お分けします!

ふたみ花の会は、シーサイド『初春水仙花祭り』をはじめ、地域の特色を生かした花の普及活動をしている会員40名の女性中心のグループです。

会員の地道な努力によって、今年も多くの球根に恵まれました。水仙のふくいくとした香りを、皆様にもお分けしたいと思います。どなたでも簡単に栽培できます。花の少ない冬の季節に、可憐な花で心を和ませてみませんか。

ご希望の方は、下記までご連絡ください。

球根代 1kg 約20個 350円(送料別)

球根代は、今後の花の普及活動に役立てていきたいと思ひます。

問い合わせ先 ふたみ花の会事務局

(双海町役場 地域振興課 TEL 089-986-1111)

地域課題研究サロン「地域経営学のススメ」開催

現在、地域の活性化を目指して各地で様々な試みが行われていますが、多くはハードの施設整備や一過性のイベントの開催などにウエイトが置かれ、いま地域にもっとも求められている「地域経営」という視点が欠落しているように思います。

そこで、「地域経営」の概念と戦略について学び、地域としての総合的な活力を高める方策について、参加者全員で探っていくサロンを開催しますので、奮ってご参加ください。

- と き 平成14年11月11日（月） 13：30～17：00
 - ところ にぎたつ会館（松山市道後姫塚）
 - プログラム ○基調講演 平野 繁臣 氏（株式会社現代芸術研究所顧問）
○サロントーキング
スピーカー 若松 進一 氏（双海町役場地域振興課長）
稲田 繁 氏（内子フレッシュパークからり支配人）
- ※研究サロン終了後、交流会を開催予定。
- 問い合わせ・申し込み まちセン TEL089-932-7750（担当：池田、山下）

地域づくり活動者研修交流会 開催

県内各地で地域づくりに取り組んでいるグループ・団体の関係者が一堂に会し、日頃の悩み等を出し合い研修交流する場を、県の委託を受けセンターで設けることになりました。

今回は、まちづくりの現場において、ワークショップのファシリテーター役を数多くこなされ、ワークショップの手法に精通されている徳山工業高等専門学校の熊野助教授をゲストに開催いたします。

- と き 平成14年11月25日（月） 13：30～17：00
 - ところ にぎたつ会館（松山市道後姫塚）
 - プログラム ○基調講演 熊野 稔氏（徳山工業高等専門学校助教授）
「参加型まちづくりの可能性と仕組みづくり
～ワークショップの手法に学ぶ～」
 - フロアトーキング
コーディネーター 近藤 誠氏（えひめ地域づくり研究会議事務局長）
 - 研修会終了後、交流会を開催予定。
- 問い合わせ・申し込み まちセン TEL089-932-7750（担当 奥山、山下）

BOOK INFORMATION

●お手玉が癒す心とからだ

医学博士 中原和彦 編著 海鳥社 1,500円（税別）

忙しいスピード時代には、それに合った健康法が必要です。私が患者さんを含めて多くの人たちに「お手玉を始めましょう！」と呼びかけたのも、そのような理由があったからです。

本書を読むうちに、お手玉に触れたことのない方でも、次第にお手玉の魅力に引き込まれることでしょうし、お手玉に関心のある方は、お手玉が、脳の活性化や自己実現としてのヘルスアートにすばらしい効果を発揮することを新発見されて、きっと驚嘆されることでしょう。お手玉には健康的な効果だけではなく、心のぬくもりを人から人へ伝えていく喜びや感動もあります。（まえがきより）



お知らせ (財)愛媛県市町村振興協会

市町村振興 (オータムジャンボ) 宝くじが1枚300円で発売中!

『オータムジャンボ宝くじの賞金は、1等・前後賞合わせて2億円』

1等 1億5000万円×18本 前後賞各 2,500万円×36本 2等 1,000万円×18本

売り切れ次第発売終了!

2億円

9月26日(木)発売開始!

10月1日(金)まで抽せん日:10月17日(木)
1等1億5000万円×18本・前後賞各2,500万円

枚数限定発売
お早めに!

1枚300円

新市町村振興 第17回 全国同時抽せん

オータムジャンボ

この号より、新たに「媛のかわら版」というコーナーを設けました。県内のまちづくりに取り組んでいる元氣な女性をシリーズとして紹介していく予定です。もし、あなたの周りで、この人はという方がいれば教えて下さい。

十月に入り、秋祭りも本格的にはじまります。子供から大人まで町が活気にあふれます。皆さんもパワーをもらって元氣になりましょう。

(奥山)

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒79010003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動部門

TEL089(932)7750

FAX089(932)7760

発行/平成十四年十月一日

(財)えひめ地域政策

研究センター

印刷/三創印刷株式会社

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail: info@ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。